

川上久壽先生の足跡—魯迅への傾倒30有余年—

伊 藤 森右衛門

川上久壽先生は、昭和18年7月24日小樽高等商業学校助教授として着任され、爾来34年小樽高等商業学校、小樽経済専門学校、そして小樽商科大学と、文字通り緑丘人としてひたむきな教壇生活を過された。したがって、先生のご足跡は本学の戦後史を身をもって歩まれたといつてよい。

外国語の教師としての教壇生活をふり返られて、先生は回想記に“職人論”を述べられているが、正に語学教育に徹せられた厳しい態度の表明と受けとれるのである。語学教育は職人教育に通ずるところがあるかも知れない。職人といえば中世の手工業者を思い起すのであるが、職人は厳しい教育の中から生まれるし、不断の自己練磨を必要とする。自己を作品のなかに実現しようとする強い志向を堅持していたのである。したがって、自己を没入する態度にはそれだけの厳しさがあるのである。語学教育に限ったことではなく、教育者として求められる態度かも知れない。川上先生の語学教育にご信念としてそういう態度を堅持されておられたことは、ひしひしとお人柄から感ぜられるのである。

先生は、昭和26年10月「人文研究」に「魯迅の雑文」なる原稿を投ぜられてから、われわれの目に触れたご業績すなわち49編の論稿はすべて「魯迅研究」のご成果であった。先生の「魯迅研究」は、中国における文献のみならずソ連における諸研究をも翻訳され紹介されるとともに、ご業績のなかにとり入れられて、わが国における「魯迅研究」を一層豊かにする第一人者であられたのである。先生のご足跡を辿ると「魯迅研究」の輝しい金字塔があるわけであるが、魯迅と先生との心情的かかわり合いも又はっきりと浮き彫りにできるのである。先生のお言葉を借りると「何よりも逞しくもしぶとい、言葉は穏当でないかも知れないが、雑草のようなつよさや弱者にたいする愛情と抑圧者にたいする心

底からの憎しみ、その激しい戦闘精神に心を打たれた。」と。筆者は浅学にして魯迅を知らないが、この先生のお言葉から推察すれば人間的というか、心情的というか、魯迅が先生を捉えたのではなくて、先生が魯迅と人間的に心情的に^{レゾナント}“共鳴”されているのではないかとさえ思われてならない。

先生はご在任中われわれ後輩に厳しくも、やさしいご指導を頂いた。齒に衣を着せない率直さと真情を吐露して止まない情熱とは、われわれをつねに勇気づけ、そしてまた正しい方向に導いて下さったのである。

今後も大東文化大学で中国文学、とくに魯迅研究に益々傾倒され、ご健康で大いにご活躍されることを祈念して止みません。終りに、重ねてご在任中のご指導、ご鞭撻を心から御礼申し上げ、擱筆致します。